
何処へでも郵便局

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何処へでも郵便局

【Nコード】

N5573C

【作者名】

まりも

【あらすじ】

何処へでも郵便局！。それは名前の通り、何処へでも手紙を運んでくれる郵便局。例え、死後の世界であろうと、過去であろうと、未来であろうとも…。何処へでも。

僕はいつものように仕事場でコーヒーを飲んでいる。仕事は……
ここんとこあまり入ってこないんだ。不況でね……。困ったものだよ。
貯金もあんまりもう残ってないのに……。

「今日は」

ゆつくりとドアが開いて杖をついた小柄なおばあさんが入って来た。
お客さんかなあ……。

「ああ、今日は。いらつしやい」

僕はニツコリと笑って言った。おばあさんは店をしばらく見渡し、
僕を見つめ、

「あのぉーここの看板に『何処へでも郵便局』と書いてあったんで
すけどぉ……」
と言った。

「ええ、名前の通り何処へでも手紙を運ぶ郵便局ですよ」 「では
ー…あの死後に手紙を送ることも、できるのですか……」

「もちろんですよ」

僕はゆつくりと頷いた。

「本当ですか!？」

おばあさんは嬉しそうに笑った。

「ええ」

「ではー……これを主人に届けていただきたいのですが」
おばあさんは茶色の小さな鞆から愛らしい文字で、『光一さんへ』
と書かれた真つ白な封筒を、僕に差し出した。僕はそれをそつと
手にとった。

「死後の世界ですとー……」

僕は机の引き出しから紙を1枚と鉛筆を1本取り出した。

「こちらご記入していただけますか」

「はい……」

おばあさんは小さく頷いた。

「あ！おかけになってどうぞ」

僕は椅子を指差した。

「ありがとうございます」

おばあさんはそつと椅子に腰をかけ、記入をした。

「できました」

おばあさんはくるりと紙を回して僕向きになるようにして差し出した。

「お疲れ様です。料金の方は600円になります」

おばあさんは鞆から黒い財布を出し1000円札を出した。僕は1000円札を受け取り400円を取り出した。

「400円のお釣りです」

おばあさんはお釣りを受け取り財布に入れると鞆にしまった。

「責任をもつてお届けします」

おばあさんは軽くお辞儀をしてドアを開けて出ていった。 次日
……。

僕は郵便局を休みにし、バイクで死後の世界に向かっている。

あの手紙を届けるために。

辺りが背の高い木で囲まれている。そしてトンネルの前に立ち入り禁止と表示された看板や張り紙が沢山貼つてある。僕はそのトンネルに入る。このトンネル結構長い。トンネルを抜けると土でできた長い1本道が続き、周りにはいろんな花が咲いた花畑になっている。僕はそんな道を走っていく。風が良い感じにあたり何だか気持ちが良い。空は淡い青で白い大きな鳥が優雅に飛んでいる。

道をしばらく進むと警察の制服を来た茶髪の若い男の人が腰に手をあてて立っていた。

「駄目ですよ。ここは……」

「僕ですよ」

僕はニコやかに顔をあげた。

「ああ、郵便屋さんかあ……」

男の人はほつとしたように頭をこりこりとかいた。

「でも、一応規則ですから許可証を見せてください」僕はポケットから紙を取り出して彼に渡した。

「はい、オッケーです」

「いつもお疲れ様」

「いやあ、この仕事すきなんですよ。花が綺麗ですから」
「では、また」

と別れを告げ、また僕はバイクを走らせた。しばらく走り続けるとコンクリートの道になった。周りも木が所々生えているだけの淋しい感じだ。その道をまた走り続けると美しい川が流れて川には小さな木でできた舟が浮かんでいて、その前に1匹の青い鬼が立っている。

「オメエさんは……」

「郵便局の者です」

「あああ、あの噂のお。この後はー」

「天の川でしょ」

僕はニコリと笑ってウィンクした。

「いやあ、お見通しっすねえ」

「じゃあ、舟にバイクを運ぶの手伝ってもらえますかあ？」

「ああ、わかりやした」

1人と1匹でバイクを運び、鬼がゆっくりと舟をこぎ始めた。

「いやあ、大変ですねえ、時を行き来したり、生の世界や死の世界を行き来するんですからねえ」

「ああ、まあそうですねえ、手紙を貰った人が幸せそうな顔を見ると何だか幸せな気分になるんですよえ」

「なるほど、そういうのも良いっすねえ」

鬼はにんまりと笑った。

「さあ、着きましたよ」

舟はコトンと小さな音を立てた。

「よいしょと」

バイクを岸に置くと

「では」

と鬼はまた舟を漕いで行ってしまった。僕はまたバイクに乗って走り始めた。「天国ー！」

「ありがとうございます」

「地獄ー！」

「たっ助けて下さい！お願いします」

閻魔大王のいる所に着いた。近くにいた赤鬼に僕は声をかけた。

「あのおー郵便局の者なんですけれども…宛先の人は何処にいるか調べてもらえますか？」

僕はそう言っただけでおばあさんが記入してくれた紙を渡した。

「うむ」

赤鬼は深く頷くと机の上に置いてあるパソコンを打ち始めた。そしてコピー機のようなものがピーとうなりながら紙が出てきた。それを赤鬼は取ると

「ほらよ」

と言っただけで紙を僕に差し出した。紙には『天国 夢見花畑市向日葵町
〇-〇 郵便番号〇〇〇-〇〇〇〇』と書いてある。

「ありがとうございます」

僕はそう言っただけでまたバイクを走り始めた。そして天国へと続く道へと進んだ。いろとりどりの美しい花たちが見えはじめた。鹿やリスのような可愛い動物もいる。そしてオシャレな家が沢山並んでいる。向日葵町は遠いのかなあ。僕は地図を手にとった。少しあるみたいだ。僕は長いこと走り続けた。すると向日葵畑が一面に広がっている所に出た。

「ああ、あの家だ」

赤い屋根の家が目についた。表札には『高上 光一』と書いてある。その家の前に一人のおじいさんがいる。その周りには沢山な子供達が並んでいる。近づいてみると駒で遊んでいるのが見えた。

「おじいちゃん、できないよお……」

1人の髪を2つに結んだ女の子が嘆いている。

「構えがわるいんだよ。構えはこうだ」

おじいさんは駒をする時の体制をとった。

「こうして勢いよきひもをはなすんだ」

「あのおー……高上 光一さんですかあ？」

僕はおじいさんに話しかけた。

「そうですけど……」

「あなたに手紙を届けに来ました」

僕はニツコリと笑つあの手紙を差し出した。

「私にですかあー？」

おじいさんは手紙を手にとると

「さつ佐恵子サエコからだあー!!」

と目を大きく開いて言った。

「ありがとうございます」おじいさんは満面の笑みを浮かべた。

「いえいえ」

この瞬間が僕は好きだ。

「おじいちゃん誰からあ？」

と男の子は興味津々にいった。

「妻からだ」

「読んで読んで」

「読んで」

「読んでよー」と子供達は一斉に頼み始めた。

「わかったわかった」

おじいさんは封筒から紙を取り出し、手紙を読み始めた。 「光一

さんへ

今日は。足は悪くなりましたが私は今もおかげ様で元気に春を迎えることができました。

長女的美恵子は昨年、子供が大きくなったからとパンを作る仕事を始めたようです。大変そうですが、友達ができたとか少し楽しいみたいです。子供の美華は今年中学に入ったようです。テニス部に入

り楽しくて仕方がないみたいですよ。夫の昇一さんも大分会社に認められたようです。次女の菜衣子は今も独身でバリバリ仕事をしています。仕事がすごく楽しいようです。

長男の竜彦は新しい商品を開発するのに没頭しています。そして無事に花嫁を貰うことができました。凄く良いお嫁さんで、よく一緒に買い物に行くんですよ。私の楽しみの1つです。

光一さんと過ごした日々はとても幸せでした。

貴方に高校時代、告白を受された時、どんなに嬉しかったことか。初めてのデートで動物園に行ったことも未だに鮮明に覚えています。両親に結婚を反対され、駆け落ち何かしましたね。裕福な生活ではありませんでしたが、幸せでした。その後美恵子が生まれ、貴方が喜んでくれた時は嬉しくて嬉しくて。その後の思い出も幸せなものばかりが頭をよぎります。光一さん、私は今でも、いえ、永遠に愛しています。死後の世界で会えますようにと願っています。最後になりましたが若い女性とーなどはないようお願いします」 おじいさんの目からポロポロと大粒の涙が流れている。おじいさんは写真であろう紙を封筒からだし、ニツコリと笑った。

「おじいちゃん、見せてえ」

「私も見たい」

「僕もお」

次々と子供達は声をあげた。僕はバイクにまたがった。

「郵便屋さん、待ってください」

「何でしょう？」

「返事を佐恵子に書くので、少し待ってもらえますかあ？」

「良いですよ」

僕は笑顔で答えた。

「どうか、中へ」

おじいさんは家のドアを指差しながら歩いた。

「ああ、すいません」

僕はバイクから離れ、家へと歩いた。

「私もお」

「僕もお」

子供達がまた次々と声をあげた。

「わかったよ」

おじいさんは少し子供達の方を振り返ってから家に入った。

テーブル1つと椅子が幾つかある部屋に案内された。おじいさんはお茶とようかんを出してから他の部屋に行ってしまった。僕は子供達とお喋りをしながらおじいさんを待っていた。結構時間がかかっている。

「すいません、お待たせして……」

おじいさんは白い封筒を持ってきた。

「おや……」

おじいさんが見た先にはぐっすりと寝た子供達が映ってた。

「寝ちゃったみたいです」

「まあ、ゆっくり寝かしておきます。子供達がいると何だか家の中が明るくなる感じで楽しいんですよ。はい、こちらをお願いします」

おじいさんは僕に手紙を渡した。

「こちらにご記入お願いします」

と僕は鉛筆と紙を取り出した。

「ああ」

おじいさんはそれを素早く記入し僕に差し出した。

「あのお、生の世界でいう料金みたいのは……？」

僕は紙を受け取り

「いりませんよ。料金は死の世界からの場合が無料です。お金が存在しないので……」

と説明した。

「そうですか」

「では……失礼します」　そして、僕は今あのおばあさんの家の前にいる。

「あら……この前の郵便屋さん」

おばあさんはちょうど家から出てくる所だった。

「今日は」

僕はいつものように笑顔で挨拶した。

「郵便です」

僕はあのおじいさんから受け取った、封筒をおばあさんに差し出した。

「光一さんから!」

おばあさんは嬉しそうに封筒を開け、紙を出した。

「お父さんがどうしたのお?」

家の中から若い女性が出て来た。

「あら、今日は」

その女性は僕を見ると微笑んで挨拶した。

「今日は」

おばあさんはふふつと笑いながらも涙を浮かべている。この瞬間が、僕には嬉しい。この仕事、まだ、辞められないな。僕はまたいつもの様にコーヒーを飲んでいた。するとドアがゆっくり開いた。お客さんかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573c/>

何処へでも郵便局

2010年10月18日02時00分発行